

海外出張報告書（教員）

2012年 4月 6日提出

氏名	荻和 宏明
所属	大学院獣医学研究科
職	准教授
出張先	メキシコ国立自治大学
出張期間	2012年 3月 15日～3月 20日
目的	メキシコ国立自治大学主催の疫学調査への当研究科大学院生の参加に関する協議と日本への検体輸送方法の確立

活動内容

メキシコ国立自治大学はメキシコシティ南部に広大なメインキャンパスを擁し、学生数が約 29 万人というラテンアメリカで最大規模を誇る大学である。メインキャンパス内には約 40 の学部・研究所、文化センター、生態系の保全区域、中央図書館、博物館などが存在しており、統一性と計画性のもとに作り上げられた本キャンパスは 2007 年にユネスコから世界遺産の認定を受けている。メキシコ国立自治大学は国外から多くの留学生を受け入れるなど、国際性豊かな教育を実施しているのに加え、研究活動も非常に活発であることから、ラテンアメリカの大学中で最も高い評価を受けている。



メキシコ国立自治大学の中央図書館
世界最大の壁画が描かれている。

今回訪問したのは同大学の生物学研究所である。同研究所にはメキシコ国内の一流の生物学者が多数所属しており、彼らの活発な調査活動によって膨大な生物標本が蓄積されている。これらの標本類のうち哺乳類の標本は、豊富な収蔵品数や、行き届いた標本管理などが評価され、アメリカ哺乳類学会から優秀標本コレクションとして認証されている。



生物学研究所の建築群と中庭



生物学研究所の収蔵標本の一部

今回の訪問では同生物学研究所の Dr. Cornelio Sánchez-Hernández (教授)と Dr. María de Lourdes Romero-Almaraz (教授)が対応してくれた。Dr. Sánchez と Dr. Romero は小型哺乳類の専門家であり、同研究所の教員として小型哺乳類の生態や分類に関する研究と教育に長年従事している。2005 年以来、当研究科の公衆衛生学教室では、両博士と共に、メキシコ国内で 3 回のげっ歯類の野外調査を実施して、ウイルス性人獣共通感染症の共同研究を進めてきた。今回の訪問では、両教授が主体となって実施している野外調査に、当研究科の大学院生が参加可能かどうかについて具体的な協議を行った。幸い両博士からは、ウイルス性人獣共通感染症の共同調査の一環としてならば、大学院生の受け入れには何の支障もない旨の了解を得ることができた。両博士は小型哺乳類の専門家として長い経験を有し、メキシコ国内に生息する小型哺乳類の生態や分類に精通している。したがって、メキシコ国内で実施される両博士の調査に参加することによって、小型哺乳類の捕獲法、捕獲動物の計測法、採材法、標本作製法など野外調査の基本的な手法を習得することが可能である。人獣共通感染症の疫学的研究を推進する上で野生動物の捕獲は不可欠であり、本調査への参加は大学院生が将来人獣共通感染症の専門家となるための貴重な機会となるものと考えられる。

今回の出張では、野外調査で得られた生物材料をどのようにメキシコから輸出し、日本国内に輸入するかについて具体的な手段を確立することをもう一つの目的としていた。生物材料の国外輸出はどの国においても手続きが年々困難になりつつあるのが現状であり、今回のメキシコ出張時には 2009 年の調査時の検体がまだメキシコ国内に冷凍保存されたままの状態であった。そこで、これらの検体の日本への輸入を実現するため、Dr. Sánchez と Dr. Romero と共に、日本通運メキシコ支店の内山氏を

訪問し、内山氏、両博士、苅和の4名で、輸送手続きや方法について打合せを行った。まず最初に、ワシントン条約で貿易が規制される動物種の検体が含まれていないかについて内山氏から確認があった。続いて、Dr. Sánchez が荷送人となってメキシコからの検体輸出の手続きを進めてもらえることが了承された。日本通運への訪問後、Dr. Sánchez は内山氏からの指示に従って慎重に輸出の準備を整え、3月28日にメキシコから検体を輸出してくれた。4月1日には成田空港で通関が終了し、4月2日に公衆衛生学教室に無事検体が到着した。なお、今後の疫学調査で得られた検体においても、今回と同様メキシコ国立自治大学で一時冷凍保管の上、日通メキシコ支店を通じて輸出するという点についても打合せ参加者全員の合意が得られた。海外の野外調査で得られた生物材料を日本国内に輸入するには様々な困難があるが、今後のメキシコからの検体輸送においても Dr. Sánchez と Dr. Romero の全面的な協力が得られること、検体は日通メキシコ支店を通じて輸出が可能なが確認された。



メキシコ国立自治大学生物学研究所前で
左が Dr. Sánchez、右が Dr. Romero



日本通運メキシコ支店
(メキシコシティ)

本出張では、以下の 2 点において大きな成果が得られた。

- (1) 博士課程教育リーディングプログラムの授業科目である海外実践疫学演習／海外共同研究演習において、当研究科の大学院生引受先としてメキシコ国立自治大学生物学研究所の全面的な協力が得られることとなった。
- (2) メキシコ国内で得られた野生動物の検体の日本への輸送経路が確保されたため、当研究科において検体を解析することが可能となった。

今後、当研究科の大学院生がメキシコ国内において自分自身で採材した野生動物の材料を解析するという経験を通じ、人獣共通感染症の研究者として成長してくれることを期待している。